

宗教における「身体」と「欲望」の位置

大塚秀見

宗教における「身体」と「欲望」の位置

大塚 秀 見

はじめに

「身体」および「欲望」に関する事柄は、現代の私たちにとっては本質的ではないもの、つまり二次的なものとして理解されてはいないだろうか。精神と対比される形での「身体」には明らかに一段低い位置づけがなされていると考えられる。また、欲望を制御する「禁欲」が、欲望よりも高次元であるという考え方には、やはり「欲望」に対する二次的な位置づけが見てとれるのである。「身体」と「欲望」という人間の生存と切っても切れない関係にあるものが、二次的な位置に追いやられてしまっている現状とはいかなるものなのだろうか。

しかし、「身体」および「欲望」が劣位に置かれていることは、必ずしも近代になつてはじめて登場してきた考え方というわけではない。この考え方は、人類においてかなり早い時点から、有されていた考え方もいう見方のできるのである。だが、近代合理主義以降に、「身体」および「欲望」に対する位置づけは見た目にはあまり変わらないが、根本的な観点からみると大転換がなされてしまったのである。それは、隔絶した二元論を基軸

としたがゆえに、「身体」や「欲望」の位置は完全に常態的に負の状態になってしまったのである。

「身体」について考えてみるならば、単純に考えてみても「精神」との関係から、一段低く見られることはある程度仕方がない流れではある。しかし、だからといって「身体」を単純に捨て去ることはない。それでは、人間が人間でなくなってしまうからである。人間は間違いようもなく、「身体」との連関の上に成り立っている。そのことは自覚として、少なくとも近代以前には大前提として、人々には暗黙の了解事項であった。その上で、二元論的な考えが成立していたと考えられるのであるが、近代合理主義的な考え方以降は、その大前提が崩れてしまっているように思われる。すなわち、「精神」の一人歩きが行なわれてしまったのである。それでは、「精神」と「身体」の連関の上に成り立っている人間はバランスを保つことはできないのではないだろうか。

宗教の世界においても、この「精神」の一人歩きが、現代では力をもってしまっている。そのような状況の中で、「身体」や「欲望」は、宗教の世界ではいかに位置づけられているのだろうか。

しかし残念ながら、このことは宗教研究において正面に掲げられて論じられることの少ないテーマなのである。本稿では、智山伝法院の現代宗教研究室を中心に行なった、平成十四・十五・十六年度の共同研究の成果を踏まえて、宗教における「身体」と「欲望」について考えていくこととする。特に、現代の知的潮流における「身体」および「欲望」理解との違いを中心とし、本来宗教では「身体」および「欲望」がどのように捉えられているのかについて考察を試みる。

一、現代思想における「身体」の位置

私たちは、日常の知的関心として、「身体」をどのように理解しようとしているのだろうか。特に、ここでは問題を、無意識に使っている日常生活の中のある方ではなく、私たちが「身体」について考えようとする時に、どのような思考パターンで捉えようとしているのかという視点に絞って考察を進めていくことにしよう。

まず、一般的な見方に関して、哲学者の中村雄二郎は次のように述べている。

身体について現在私たちがいちばん強く抱いている一般的な見方、通念はどのようなものかといえば、それは心と軀、精神と身体とを分けて別なものと考える見方であろう。しかもこの考え方の淵源はきわめて古い。魂や心が肉体のなかに生誕とともに棲みこみ、死とともにやがて立ち去るといふ考え方は原始人や古代人以来のものだからである。⁽¹⁾

ここではまず、一般的な見方、通念として、「心」と「軀」、「精神」と「身体」とに分けて考えることが指摘される。一人の人間の構成要素として、この二つが大きな位置を占めていることになる。この「精神」と「身体」の二つに分ける二分法が、現代思想における「身体」を捉える言説の最も特徴的な見方なのである。

そして、この問題の本質を私たちに見えにくくしているのは、中村の指摘にもあるように、古代から二分法の概念があったという事実である。しかし、古代からの二分法と近代以降の二分法には大きな違いがある。古代以来の二分法、つまり肉体が魂や心の入れ物として見る見方をするならば、入れ物なしでは魂や心は、この世界に

存在することはできなくなる。つまり、「身体」をマイナスイメージとして受けとめているわけではなかったの
である。この点に関して、中村はまた次のように述べている。

思考する精神と拡がりをもった物体という存在の二元論は、その展開として、観察し認識する主観（主体）
と観察され認識される対象（客観）という認識の二元論をもたらし、すべてこの世の中のものにはここに、主観
（見るもの）と対象（見られるもの）に二分されるようになった。そのような全体の枠組のなかでは、当然の
ことながら、物体そのものとして身体は対象（見られるもの）の側に入れられ、もっぱら見られる対象として
扱われる。医学の、医者立場がそうであるだけでなく、私たち一人一人が自分の軀を、身体をそのようなも
のとして見るまなざしを知らず知らずに身につけてしまう⁽²⁾。

ここで指摘されているように、近代合理主義は、デカルト以来、二元論的な思考のもとに発展してきた。主体
と客体という意味での二元論が、現代のような形で私たちの基本的な考え方となったのは、デカルト以降の、近
代の出来事なのである。より正確にいうならば、言葉で論理的に表現しようとする知識人たちの考え方では
なからうか。現代でも多くの人々の直感の中には、感性に訴える部分において、必ずしも、二元論的な思考にな
っていないと考えられる。

このデカルト的な考え方は、物事を整理し、技術的な積み重ねを容易にするために、文明の発展とともに、必
然的に近代西欧の前提となったのである。現代の私たちの思考も、このデカルト的な二元論の考えを抜きにして
は成立しない。

ここで一番注意しなければならないのは、この考え方、つまり二元論的な思考方法が、人類の有している中のすべての考え方ではないという点である。実際には、便利で、都合が良いから、一時的に使っているだけなのである。この点に気づいて、私たちはこの「便利だから利用しているだけ」という視点をもたなければならないだろう。「身体」は自分自身でもあるわけだから、単なる「客体」として片付けてしまいうわけにはいけないのである。

日本を含めた多くの非西欧の国々においても、西欧的な二元論、西欧キリスト教的な考え方が優位を占めてしまっているのが現状なのである。つまり、欧米思想、キリスト教思想によって現代の世界の思想潮流は一色になってしまっていると言っても過言ではない。このような思想状況にあつて、非西欧世界の出来事を非西欧的な観点に立って理解しようとする、タラル・アサドは、彼の人類学の「知」の分析を通して、次のように主張している。

モースによれば、人間の身体は、単に「文化的印影」の受動的な受け手と見るべきものではない。まして「地域的な歴史と文化を身にまとった・・・自然的な表現」の能動的源泉などと見るべきではない。それではまるで、読解可能な記号の中に内面的性格が表現されており、この記号を手段として用いれば内面的性格も解読できるとも言うかのようなのである。身体は、多様な人間的努力目標——身のこなし方（例えば歩き方）に始まって、感情の置き方（例えば落ちつき）を経て、精神的体験のあり方（神秘的状態）に至るまでの種々の目標——を達成するための、成長可能な媒体というふうに見るべきものである。こうした議論は、精神と精神の知覚の対象物とのデカルト的⁽³⁾二元論を逃れるもののように思われる。

フランスの社会人類学者のモース（一八七二—一九五〇）は、身体性に関して、先駆的な業績を残している。そして、これを受けたアサドの指摘はとも刺激的なものである。私たちは現在、すべての物事を説明しようとする。そして、それが可能だと思ひ込んでしまっている。地域性、歴史文化、それぞれの要素を分析していけば、答えがあるものだと思ひ込んでしまっている。

つまり、私たちは現在、どのようなものでも理解可能、説明可能というように考えてしまっている。自分たちが、すべてのものは読解可能という、一歩高みにあるような錯覚をもってしまっているのではなからうか。ここでの指摘は、私たちの意識を、西欧近代の意識を根底から問い直すものとなっている。

このような観点に立って、「身体」の問題は考え直されなければならないのではなからうか。合理性、功利性を抜きにして、問い直さなければならないのである。

二、宗教における「身体」の位置

宗教の世界においても、「身体」および「欲望」は、西欧近代化の流れの影響を受けて、質的に大きく劣ったものとしての位置づけがなされてきた。西欧近代化の流れと西欧キリスト教の思考は、まさに密接に絡み合ったものである以上、西欧キリスト教が「精神」「禁欲」に価値を見出したことは必然的な流れであった。

日本の明治以降の宗教状況、海外の脅威を感じはじめた江戸後期以降の知的潮流は、西欧近代イコール、キリスト教であったため、キリスト教的な宗教のあり方がすぐれた宗教のあり方であると誤解してしまっただけである。この誤解の構図は、今でも根強く知識人には受け継がれてしまっている。自分の頭で考えないと矛盾には気づかないものであり、単純に別の答えがでる問題でもない。

近代以降の日本人知識人のキリスト教信奉的な、宗教理解の問題は、別の機会に譲ることとしよう。ここでは、西欧キリスト教における「身体」および「欲望」の扱われ方が、日本にもそのまま輸入されてしまったこと、それを正しいものとして受け入れてしまったということのみを確認しておこう。

このことは、西欧キリスト教と構想を異にする真言宗にとっては厳しい現実であった。だが、ある意味で親近性をもっていたが故に、実際の信仰状態を無視する形で理論化に走って、建前と現実が大きく離れることになってしまった浄土系教団よりは、本来の意味での被害は少なかったのかもしれない。

宗教における「身体」の問題に戻ろう。「身体」はデカルト以前の歴史の流れにおいても、論理上は必ずしも好意的に論じられてきたわけではない。宗教において、「精神」に対して優位となった時期はないのであるから、言うまでもないことであろう。それでも、近代以降とは異なり、「身体」は、ある意味必然的な人間のあり方の中で、一定の位置を占めてきた。

現代は、宗教的に不安定な状況にある。だが、このことを一般論化すると、すぐにイスラーム世界における宗教の台頭をどう説明するのかという質問が飛んで来よう。現代、不安定な宗教状況にあるのは、西欧キリスト教とそれに倣った諸宗教なのである。これはある意味当然の結果とも言えよう。西欧近代と表裏一体となった西欧キリスト教は、疲弊しており、同じように西欧キリスト教を「宗教」のお手本のように考えて見習ってしまった諸宗教も、同様に疲弊しているのである。

つまり、「精神」優位という状況が、近代の行き詰まりの中で破綻しかけているのが現状なのではなからうか。この状況の打開のためには、単なる「身体」および「欲望」の復権だけでは通用しない。AかBかではないあり方が求められているのである。「精神性」重視の考え方の基本構造そのものを転換するのには無理がある。「精神

性」を抜きにして宗教論理は構築できない。宗教論理を放棄してしまうことも、一時的な解決になることもあろうが、継続的な解決には論理矛盾をきたしてしまいうように思われる。

ここで、西欧キリスト教では、「身体」をどのように捉えているのかについて確認してみよう。鶴岡賀雄氏は、次のように述べている。少し長くなるが引用してみよう。

宗教にとって不可欠の要素であろう儀礼や戒律は、なによりも身体に関わることがらだろう。これを、礼儀や規律というところにまで掲げてみれば、事は狭義の宗教の枠を越えても問われることとなる。

また、一見純粹に精神的な事柄、あらゆる身体性から脱出する出来事のように思われもする神秘体験の類も、非西欧世界の宗教伝統では、むしろ身体ないし身体性に深く根ざした体験として考えられ、実践されてきた。だから、西欧キリスト教の達人たちが行う苦行・禁欲(asceticism)は、概して身体ないし肉体の欲望や力を弱め克服して、精神の力をそれだけ増大させるための努力と考えられてきたし、西欧諸語においてそうした神秘的体験を指すecstasy, raptureといった語彙は、二元来身体からの魂の脱出、離脱を意味している。そうした純粹精神の存立を認めない、デカルト的物質観に徹した自然科学からの神秘体験へのアプローチは、脳内の化学物質やニューロン回路という物質の次元に還元してこれを捉えようとするだろうが、しかしそれも、同じ心身二元論の内部でのことと解しうる。しかるに、いわゆる「東洋」の諸宗教では、「体を鍛える」ことが即ち「精神の陶冶」でありえた。ここでは、宗教の真理は身体と分離された精神によってではなく、精神と「一如」である身体の「行」「修行」によってこそ把握され実現される、と考えられることがむしろ一般なのである。そうした場面では、苦痛や快楽を含めたさまざまな身体感覚の豊饒性が、宗教の真理が追究され実現していく

フィールドとなるだろう。⁽⁴⁾

ここでは大きく分けて三つの重要な問題が指摘されている。まず、宗教にとって大事な部分を占める「儀礼」や「戒律」が「身体」と重要な連関をもっているという指摘である。宗教にとって、身体との関係は無視して語ることができない。この視点は、私たちが注意して保持しないといけないものである。なぜなら、現代の思想状況、宗教状況においては、「身体」に関する事柄が軽く扱われてしまう傾向にある。それは、無意識下に働いてしまっている規制なのである。だから特に、注意すべき点なのである。

第二は、非西欧世界の宗教伝統と西欧キリスト教では「苦行」や「禁欲」に関する考え方が異なるという指摘である。非西欧世界では、「苦行」や「禁欲」によって「身体」ないし「身体性」が影響を受けて高次元の結果が得られるのである。しかし、西欧キリスト教では、「身体」「肉体」がもっている負の力を弱めるために「苦行」「禁欲」が行なわれ、それによって「精神」の力が高められるという発想なのである。つまり、西欧キリスト教においては、「身体」は限りなく「なくてよい存在」なのである。このように「身体」に関する見方に大きな違いがあることがわかる。西欧キリスト教、イコール西欧近代と、他の諸宗教は、「身体」をめぐる立場に根本的な違いがあるということが理解されるのである。

第三の点は、自然科学からの宗教経験へのアプローチに対して、二元論の立場に立って、還元主義的に解釈しようとする限り、非西欧キリスト教の宗教の理解は無理だという指摘である。この還元主義的な解釈こそが、西欧近代の論理そのものなのである。物質文明、技術文明の進歩に貢献した理念であるために、人間を含めたすべてのものに当てはめて考える流れにある。そのことを反省する視点が、是非とも必要なのである。

三、宗教における「欲望」の位置

次に、問題を宗教における「欲望」の位置づけを中心として考えていくことにしよう。それではまず、「欲望」の問題をキリスト教ではどのように考えているのだろうか。吉山登氏は「性と結婚の倫理」の中で次のように述べている。

現代のように、性快楽が快樂主義的に追求される時代に、性の生理的な現実をも人格化するには、マスターベーションの倫理性を問うような努力は評価されなければならない。それはカトリック教会が、人間の性の生殖的機能を無視した性行为に導くがゆえに人工的避妊を厳しく非難する場合にも、現代人に反省を促しているのである。⁽⁵⁾

ローマ・カトリックは、世界最大の宗教教団である。一つのピラミッド型の組織としては、他に類例をみない最大勢力である。緩やかな連合体の場合には、さまざまな見解が並立することが可能であるが、ピラミッド型の教団においてはそうはいかない。そのため、統一的な見解が求められるのである。現代において、人工妊娠中絶などの賛否両論ある問題にもどちらかの見解のみが正しいと判断しなければならぬのである。

どれか一つの考え方のみが正しいとするのは、西欧近代の流れ、一神教の論理とも合致している。現代人に反省を促しているという観点には、一部賛同できる面もある。しかし、その目指す方向が近代的思惟とは反対方向であるとはいえず、同次元に立っていることが根本的な問題なのである。だからこそ、根源的な支持を得ることに

は程遠いように思われる。

次に「禁欲」という面について考えてみよう。すぐに、インド独立の父と称えられるマハトマ・ガンディーのことが想起されよう。ガンディーの徹底した態度、行いは、多くの人々に感銘を与えたのであった。ただ、死後のガンディーは、美化され、聖化されすぎていく傾向にある。⁽⁶⁾そして、その傾向が、西欧近代の論理に合致する方向で聖化していることには、注意が必要である。ガンディーの「禁欲」をインドのガンディー自身の文脈の中で理解する試みが待たれていると思われる。

近年、そのような方向での著作も、数が少ないながらも登場している。少なくとも、ガンディーの禁欲は、「欲望」および「身体」を二次的なものと考えているわけではないことは確かである。この点は、是非とも確認しておきたいところである。

また、苦行によってもたらされる変化について、中沢新一氏は、チベットの修行者の例を挙げて、興味深い指摘をしている。

体中に青い苔が生えてくるほどの絶食をおこなしながら、南チベットの山中の洞窟で瞑想をしているミラレバという名の修行者の姿を見たものは誰でも、この若い男がひどい苦しみに耐えていると判断するのである。が、じつはミラレバの体内には「大楽の火」と呼ばれる、とてつもない悦楽をともなう熱が発生していたのだ。日常生活を送っていたのでは、このような「火」が体内に発生することもないし、たとえ若く魅力的な恋人がいたとしても、このような悦楽を体験することはない。⁽⁷⁾

この修行者の場合、「欲望」は昇華されてしまっているが、「大楽の火」は「欲望」という言葉と近似なのはなかろうか。そもそも「身体」と「精神」を分離して考えるのは、この場合の本質を見誤る例なのではなかろうか。そもそも「身体」と「精神」という二分法そのものへの検討が必要なのである。修行者の体内の「大楽の火」を物理的に理解しようという方向性自体に問題があるのではなかろうか。発想の根本そのものを問い直さなければならぬ。そのことが現代の大きな課題となっていることが了解されるのではなかろうか。

結語

「身体」と「欲望」というキーワードを基に、現代思想および宗教において、「身体」と「欲望」をいかに位置づけるかについて考察を進めてきた。

現代の私たちが一般的に抱く「身体」や「欲望」に関する認識が、そもそも一つの見方、一つの考え方に過ぎないということが確認できたであろうか。私たちが研究に用いる用語、方法が、あまりにも西欧近代のものであるために、一つの視点、一つの立場に過ぎないのであるということをも十分に表現することは難しい。

現代世界の衝突でもあるイスラーム文化をどう捉えていくかという問題とも、非常に密接に絡み合っている。イスラーム文化は、非西欧近代の考え方を持っているからである。

また、真言密教の現代化という大目標に向かう時、私たちは「身」や「大楽」といった視点を、西欧近代の思想とは切り離して考えてみるべき時期にきているのではなかろうか。「身体」と「欲望」を考えること、捉えること、吟味することは、とりもなおさず、私たちに仏教の、真言宗の教えの拠点、構造がどのようなものであるのかについて、今までとは別の視点を与えてくれるように思われる。

現代において、非常な勢力を占める合理主義的、功利主義的な方向、経済性優先の社会にあって、私たちには、そのような考え方に迎合しない、別の視点、視野が必要なのである。それは、「身体」や「欲望」を本来の見方に立ち返って評価することが必要ということなのである。そしてそれは、還元主義でない見方によってこそ進められるのである。

註

(1) 中村雄二郎 『哲学の現在 ―生きることを考えること』 岩波新書 平成八年 九四～九五頁

(2) 中村雄二郎 同 九六頁

(3) タラル・アサド 中村圭志訳 『宗教の系譜 ―キリスト教とイスラムにおける権力の根拠と訓練』 岩波書店 平成十六年 八六頁

タラル・アサドは、近年注目を集めつつあるが、まだ日本ではそれほど名が知られていないわけではない。そこで、彼の略歴について、『宗教の系譜』の訳者である中村圭志氏の解説から引用しておく。

「著者タラル・アサドはサウジアラビア生まれの社会人類学者である。一九三三年生まれ、幼少時にインドに移住し、その後英国で勉強し、エディンバラ大学を卒業する。一九六〇年代の前半に、スターダンのハルツーム大学で教えるかたわら、現地のカバビシユと呼ばれるアラブ系部族のフィールドワークと文献研究を行い、一九六八年にオックスフォード大学で博士号を得ている。このと

きの研究内容はThe Kababish Arabs: Power, Authority and Consent in a Nomadic Tribe (C. Hurst & Company, London, 1970) として出版されている。その後英国で研究を続け、The Sociology of Developing Societies: The Middle East (共編) Anthropology and the Colonial Encounter (編) などを出版したのち、八〇年代から九〇年代初めにかけての主要な論文を集めた本書をジョンズ・ホプキンス大学より刊行する。現在はニューヨーク・シテュー大学の大学院で教えている。新作は、本書のテーマ「宗教の系譜」と対をなす「世俗の構成」を扱ったFormations of the Secular: Christianity, Islam, Modernity (Stanford University Press, 2003) である。この本には植民地時代のエジプトにおける法をめぐる構造的推移を扱った章があるが、これは著者の長年の研究テーマである。近年、イスラム社会と西洋との「衝突」あるいは少なくともいずれも言うべきものが深刻さを増してきた。常に中東地域の近代化や、世俗文化、宗教、宗教復興の問題を考えてきた著者

には、その文化的・構造的問題を近代の状況下に暮らす我々の足元まで掘り下げて論じることのできる学者として、大きな期待が寄せられている。」

中村圭志「訳者あとがき」前掲『宗教の系譜』所収 三三五～三三六頁

(4) 鶴岡賀雄 「《言語と身体》序論」 池上良正他編『岩波

講座 宗教5 言語と身体 ―聖なるものの場と媒体』所

収 岩波書店 平成十六年 一二～一三頁

(5) 吉山登 「性と結婚の倫理」 岸英司編『宗教の人間学』

所収 世界思想社 平成六年 二二二頁

(6) ガンディー関係の文献は非常に多く出版されているのであ

るが、例えば次の本などがここでの指摘と一致するだろう。

ヴェド・メータ著 植村昌夫訳 『ガンディーと使徒たち

―「偉大なる魂」の神話と真実』 新評論 平成十六年

(原書は一九七六年刊)

(7) 中沢新一 「苦行と快楽」 前掲 池上他編『言語と身体』

所収 二四四頁

〈キーワード〉身体、欲望、価値判断、二元論批判